

## わが友書物

慶應義塾大学法学部教授 西川 理恵子

ひょんなことから、1958年版の映画「渚にて」を見直すことになった。当時の切迫した冷戦の状況を反映して、近未来を舞台にしながら非常にリアルな作品である。北半球で起こった第三次大戦は、当然、原子力戦争であるという前提で作られている。確か、原作の方であったと思うが、なぜ、その戦争に参加しなかったオーストラリアが滅びなければならないか、という問いに対し、心理的、内心的に戦争を支持したからだ、との回答があったように思う。

戦争は、当事国の意志だけで起こるのではない。周囲の様々な状況の影響を受けつつそこへ進んでいく。それを留められる地位にある者がその意思を持たないか、または、それを支持させるために真の情報を伝えないか、自己の無力であると思いつんで、周囲で進むことを黙認することで、それが最悪の結果を招いてきた。そして、その代償を払うのは、もっとも弱く、決定とははるかに遠い立場にあるもの、ということになる。しかし一方で、民主主義が、そのもっとも弱者たちに声を与えるシステムとして発展してきているとも言える。その民主主義を支えるのが、知る権利であるが、それが効果的に働くためには、知る権利を持つ側の心構えと資質が問われる。すなわち、判断の基礎となる情報の真实性を見抜く能力と、どの情報を周囲の状況との関連性を理解しながら評価する能力を備えていることが要求される。いわば想像力と発想力、ということだと思う。では、それはどのようにして人の中で培われてきたのか。

一言、読書である。近年、ネットの発展で、必要だと思われる情報を入手するのは一見、非常に簡単になってきている。また、視覚から入る情報も、非常に多くなってきている。しかし、一方で、その情報を実際の生活や問題状況と結びつけて考えられているだろうか。その情報の信頼性をきちんと考えているだろうか。視覚情報は、見たことで安心してしまっ、カメラが写さないものがあること、編集されることを忘れがちである。レイ・ブラッドベリの「華氏451度」は、まさに、その動画の特性を利用した独裁制の恐ろしさを物語る。さらに、その世界が、人々が感情をなくし、周りの人々に対する思いやりや、共感を失う可能性も、垣間見せる。それを救うものとして、書物の可能性をこの作品は示している。

情報が人の世界を豊かにする知識や知恵になるためには、その内容を、背景を含めてコンテキストの中で理解しなければならない。得た知識や情報を総合的に把握して初めて人は、妥当な結論にたどり着けるのである。断片的な知識のみでは到底ものの、理解にはたどり着けない。

古来、本を書く人々は、その思想を伝えるべく、豊かな発想力と知識と想像力の上に命の作業として、書物を書いてきた。だから、書物を読むことは、著者と共にその思索の旅路をたどることになるのだと思う。読者は著者に共感し、また反論をするだろう。それが想像力や発想力を自然に養うことになる。そして、それは、人生の友となる。そのようなものだからこそ、本は一冊ずつが装丁も含めて、大切にされてきた。どのような分野の本であれ、一冊ずつが一つの世界なのである。そして、何度も読み返される。書く側も、それに耐えうる内容のものを書くべく務めてきたのである。

願わくば、書物がそのようなものであり続けてほしいものである。